

介護老人保健施設ライフサポートねりま

症 例 概 要 利用者氏名: 70歳代 女性 要介護2

病 名: 左恥骨骨折

利用サービス: 入所

経 過: 令和6年9月に自宅で転倒、体動困難となり左恥骨骨折の診断により近隣病院へ入院し保存加療となった。その後、ねりま健育会病院へ転院し、リハビリにより歩行などのADL動作は自立となったが、疲労感により長時間の離床が困難であった。独居のため自宅退所に対する不安も強く、更なる体力向上とうつ症状改善の目的で、12月に当老健に入所となった。

内 容

入所時、概ねADL自立していたが、BMI15と痩せて体重減少に悩んでいた。強い疲労感から臥床時間が長く、食欲不振、便秘、不眠、抑うつと複数の症状を抱え、定期処方薬を9剤内服していた。また、リハビリに意欲見せるも、居室内にとどまり、食事以外で部屋を出ることはほぼなく、他のご利用者との交流は一切なかった。

その中で、ご本人の小さな声に丁寧に耳を傾け、不安や戸惑いに寄り添うことから支援を始めた。まず、主治医が9剤から5剤へと減薬を図り、ケアワーカー・看護師は、意思決定はご本人のペースを尊重するため、情報は必要な分だけを提供するなど、決めやすいような関わり方を行った。

また、セラピストは、居室内での自主トレーニングから始め、棟内を5周歩くことを目標に距離を延ばしていき、その結果、歩幅が広がり、上肢の振りも大きくなるなど、身体機能の改善がしっかりと見られるようになった。

精神面にも変化が現れ、表情乏しく、イベントや集団レクに無関心だったが、看護師・ケアワーカーが根気よく声がけと誘導をしていく中、同室者とのささやかな交流をきっかけに心を開いていき、自分のことで精一杯だった方が、気づけば他者を思いやる姿が見られ、集団工作或体操にも積極的に参加されるようになった。最後は自ら声をかけて回るなど、本来の姿に戻られた。

簡易うつ検査（QIDS-J）では、入所時18点（重度）だったスコアが、1ヶ月後には9点（軽度）、3ヶ月後には2点（正常）へと改善。かつては「やせているから」と拒んでいた写真撮影にも、笑顔で応じるようになり、自宅退所に至った。

今回の支援を通して、心と身体の回復には「その人らしさ」に寄り添った関わりが、何よりも大切であることを改めて感じた。今後も意思を尊重しながら、自宅退所に向けて、安心と笑顔ある毎日をしっかりと

支えていきたい。

セラピスト：初期の居室内トレーニングから、棟内歩行まで身体機能全般の改善を図った。

看護師・ケアワーカー：本人の意思決定支援から積極的に他者交流ができるようになるまで、根気よく声かけと誘導を行って元気を取り戻すサポートを行った。